

パラリンピックに合わせてパリでアートの祭典を開催

～一人ひとりが「みんな」で「ひとり」で「アーティスト」～

はじめに

私たちは、パリで行われるパラリンピックの期間に合わせて、知的障がい者が楽しみながら創作した作品をアートとしてパリの会場に展示するアート展を開催します。

プラットアートプロジェクトの始まり

私たちは2001年6月1日、障がい者支援施設「シーズ」を開所しました。当時、県南部地域では高齢化、核家族化の進行が顕著で、障がい者の重度化も重なり、障がい者施設の充実が切望されていました。

阿南支援学校が新設されましたが、卒業後の行き場がない状況は変わりませんでした。「シーズ」は入所者40名、通所者20名の生活支援に当たり、生活環境を整えるだけでなく、一人ひとりの個性・能力を発揚し、自立した地域生活を目指してきました。

プラットアートプロジェクトは、障がいのある人も無い人もぶらっと気軽に参加できる。そんなオープンなプラットフォームになればという思いから立ち上げたアートプロジェクトです。



日常生活の充実のために始めたアート活動

アートプロジェクトの最初のきっかけは、創作活動に取り組む中、傍観者であったAさんが色鉛筆を掴み「僕の人」と言葉を発したことです。初めて喋ったのです。そして黙々と描き始めました。感動的でした。



様々な画材を使い自由奔放に「なにか」が描かれていきました。「なにか」を組み合わせれば一つの「作品」になるのではと考えました。「ポスター」にすれば気軽に掲示され、認知されていくであろうと。

そうして、いずれは近代美術館で「ポスター展・原画展」をしたいと思い描く様になり、一人ひとりの能力と協働の結果を芸術にすることに挑戦しました。2003 年以來、県近代美術館の学芸員・コピーライターなどの協力を得て 10 作品を制作・発表することができました。



活動創作の楽しさ、活動する姿、成果を通し、アートメッセンジャーとして自立を目指す。

2016 年より「パラレルクロッシングエキシビジョン」として著名な現代アート作家の今村源・三嶽伊紗・日下部一司・井上明彦の4氏の指導を受けながら、共にワークショップを実施しました。

2次元の平面作品から3次元立体的な空間を捉え展開する作品に進化させたことでより本格的なアート作品を制作する活動に変わっていききました。



個々の制作の蓄積を、大きな空間で講師等と協働して一つの大きな作品にまとめ上げ、展覧会に結実する。制作を発表する場を持つことで、参加者は制作の歩みを振り返り、活動の楽しさなどを反芻し、協働作業の達成感や他者との繋がりの実感を得ることが出来ます。

また、アートを観る側には、様々な気づきを促しながら、創作活動が生きていく喜びや力になることを改めて認識する機会を与えることが出来る活動となっていると感じています。

障がいの軽重に応じた制作活動には家族、友人知人、幼児等々、様々な人が参加することが出来るようになっており、障がいの程度や有無に関わらず創作の楽しい時間を共有することが出来るものになりました。



活動する姿や成果を通じて、広くアートの楽しさを伝える「メッセンジャー」として障がいを持つ誰もが輝くことが出来るのではと考えています。この視点は、障がい者の新しい文化への寄与のあり方として、これまであまり例を見なかったものだと考えています。

このプロジェクトは、徳島県内の各地でワークショップを開催し、450人以上が参加しました。徳島県での東京オリンピック聖火リレーの到着点であったアスティとくしまで、オリンピック・パラリンピックに向けて文化プログラムを発信するためにアート展を開催しました。



さいごに

パラリンピックの期間に合わせて、様々な施設・団体から多くの参加者が制作した作品が、パリに集結します。障がい者アートに理解を持つ芸術家の協力を得て、レベル向上に努めてきました。その結果、内閣府大臣や徳島県知事からの表彰も受けております。

20年余りの活動の集大成として、国籍や言語の違いを超えた共生社会の象徴的なプロジェクトとして、熱い思いを、創る喜びを全ての人々と共有したいです。